

李志恒『漂舟録』にみえる「石将浦」について

On 'Seokjangpo (石将浦)' found in "Pyojurog (漂舟録)" written by Lee Ji-Hang (李志恒).

中村 和之*
Kazuyuki NAKAMURA

はじめに

1696年(元禄9, 肅宗22), 北海道の北部にある礼文島に漂着した朝鮮王朝の下級官吏である李志恒の残した『漂舟録』は, 17世紀末の北海道についての貴重な記録である。漢文で記されていることもあってか, この史料が北海道史や日本列島の北方史の分野で注目されるようになったのは, 1994年に池内敏氏による日本語訳(池内1994)が発表されたのがきっかけである。その後, いくつかの研究が発表されたが(池内1995, 池内2006, 中村1998), 必ずしも研究が進んでいるとはいえない。だがこの史料は, 17世紀の北海道のアイヌ語やアイヌの人たちの生活文化の記録として, 非常に貴重なものである。

本稿では, 『漂舟録』の研究の基礎作業のひとつとして, 「石将浦」という地名について考察を加えることにしたい。

1 李志恒『漂舟録』が伝える漂流してから松前着までの顛末と日本側の記録

まず, 李志恒『漂舟録』の記述に従って, 漂流してから松前に着くまでの彼ら一行の動きを辿ってみよう。以下, 池内敏氏の日本語訳から適宜要約して紹介する。

李志恒は, 4月13日に, 東萊府から寧海に向かう目的で船に乗って出発した。浦ごとに停泊して, 4月28日出航した後, 乗っている船が流され, 12日間の漂流の後に「泰山」のような陸地が見えたので, そこに上陸した。山の中腹から上は雪がいっぱいに覆っており, 人はみな黄色い衣を着て, 黒い髪に長いひげであった。李志恒の一行には, 釜山出身の金白善という倭語(日本語)ができる者がいたので, 話しかけてみたが全く通じなかった。李志恒は, 丘の上に立ってまわりを眺めてみたところ, 陸地が東北側に見えたので, 小さな海をひとつ越えてそこにたどり着いた。そこにも同じような人たちが住んでいた。土地を指して名を尋ねたところ, 諸毛谷(je-mo-gok)と言った。そこから30里ほど移動したところで土地の名前を尋ねたら, 占毛谷(jeom-mo-gok)と言われた。山すその高くなったところに登って眺めてみたところ, 東南間に長い陸地が見え, 山がそびえ立っていた。そこを指して尋ねたところ, 至谷(ji-gok)と答えられた。距離を見積もってみたところ, 30里ほどであったが, 実際にはもっと遠かった。そこにたどり着いて地名を尋ねたところ, 小有我(so-yu-a)だと言われた。

数日間そこにとどまり, 堯老和那(yo-ro-hwa-na)という草の根を掘り, 粥を作って食べた。この草の葉は芭蕉によく似ており, 根は大根によく似ていた。また, 自分たちの衣服と貂皮の服などを交易した。船を指さしながら, 帰る道を聞いてみたところ, 手で南方を示し, 息を吹き出して風の意を示してから, 마즈마이(ma-jeu-ma-i)と言った。そこで, 東方にある陸地沿いに南下した。途

*函館工業高等専門学校 教授

中で出会った人に同じ問いをくり返したが、彼らは마지마이 (ma-ji-ma-i) と言うばかりだった。21日目に、海岸の高いところから手を振りながら呼ぶ人たちがいた。それは二人の倭人で、金白善とも少しはことばが通じた。彼らは南村府 (nam-chon-bu) の倭人で、金を採掘するためにそこへ来ているということであった。彼らは、白米・葉たばこ・醤油・塩をくれ、さらに緘封した手紙を渡してきた。手紙を開けてみたが、日本の文字だったので、内容はわからなかった。ただ、文章の下に、漢字で「松前人新谷十郎兵衛」と書いてあった。すぐに出発し、50里ばかり進んだところで停泊した。金白善に、紙に筆で倭語を書いて尋ねさせたところ、国号は蝦夷国、地名は溪西隅だった。翌日、7,80里進んだところで上陸した。そこには倭人の頭目がいて、「私は松前奉行の者で、名は新谷十郎兵衛である」という短い文章を書き示した。また、初めに停泊したのはどこかと聞かれたので、金白善に諸毛谷 (je-mo-gok) という地名を発音させたところ、その倭人は「蝦夷地の果てである。ここからは2000里ほど遠ざかっており、松前からすると3600里ほどである」と答えた。また「あなた方が停泊したと聞いたところの外側には、また別に羯悪島 (ga-rak-do) と呼ばれるところがある」とも言った。

7月1日に、新谷十郎兵衛の船に乗り、武田大兵衛・仙台六右衛門・秋田喜左衛門などとともに出発した。一行のなかには、蝦夷通事の高山間兵衛もいた。李志恒は、船のなかで蝦夷通事に漢字を書いて質問した。李志恒が「蝦夷が『마즈마이 (ma-jeu-ma-i)』というのは何のことですか」と質問すると、高山は「松前のことです」と答えた。同じく『『앙그랍애 (ang-geu-rab-e)』』とは何ですか」と質問すると、「平安という意味です」と答えた。『『빌기의 (bil-gi-wi)』』は何ですか」と質問すると、「暖かい (優しい) という意味です」と答えた。『『악기 (ak-gi)』』とは何ですか」と質問すると、「水です」と答えた。『『아비 (a-bi)』』とは何ですか」と質問すると、「火です」という返答であった。4日進んだところで、逆風に遭い浦口に船を停めて留まった。連日逆風が吹くので、同じ所に留まったまま3日になった。翌日、海岸沿いに進んだ。3日過ぎてのちに、大きな海をひとつ越えて、あるところに到ったが、そこは石将浦 (seok-jang-po) と呼ばれていた。その海は蝦夷国との分界となる海であった。7月10日甲子、南風が強く吹き、雨が降りしきった。十郎兵衛は、李志恒が悲しがっている様子を見て、金を出して美酒を買い求め慰めてくれた。日本語のできる金白善は、李志恒とは別の船に乗っており、お互いの様子について話を交わすことができない状態であった。同月23日、松前府の北方100余里ほどの曳沙峙 (ye-sa-chi) というところに到着し、3日留まった。ここから李志恒だけが輻かごに乗り、26日、松前まで70里ほどのところに到った。27日、松前まで10里ほどのところで食事をし、衣冠を端正にして松前府に入った。

以上が、『漂舟録』の記す李志恒の行動である。彼らについては、日本側に対応する史料がいくつか残されている (松本・三浦・東 2006)。最もまとまっているのが、『福山秘府』巻之30~31の朝鮮漂人部上・下である (北海道庁 1936)。以下、同書に従って李志恒一行の行動を辿ってみよう。

まず、李志恒が東萊府を出発したのは、4月13日であり、28日に強風に会い流された。途中で日本の大きな船に出会って食料や水を貰い、その船について進んでいたが、強風ではぐれてしまった。5月12日に、日本の北の土地にたどり着いたとある⁽⁴⁾。この地とは「レフンシリ」、つまり礼文 (れぶん) 島のことであろう⁽⁵⁾。李志恒は漂流して12日目に陸に着いたと記しているが、実際には14日目である。「レフンシリ」から「リイシリ」を経て、5月13日に「ソウヤ」に着いた。「リイシリ」は利尻島^{りしり}、「ソウヤ」は宗谷である。宗谷では蝦夷の世話を受け、数日滞在してから5月20日に羽保呂へ着いたが⁽⁶⁾、ここは現在の羽幌^{はぼろ}である。羽保呂では、金堀奉行の新谷十郎兵衛に保護された。羽保呂を出発した日は、李志恒の言うとおりの7月1日と見て良いであろう⁽⁷⁾。したがって、40日間も羽保呂に留められたことになる。この間、取り調べを受けたものと思われる。その取り調べが、キリスト教に関するものであったことを示唆する史料も残っているが⁽⁸⁾、なぜか李志恒はそのことについ

て全く触れていない。また、羽保呂に着くまでの間の行程についても、アイヌの男性から鱒を恵んでもらって食べたなどの記述はあるものの、ことばも通じない未知の土地を自力で進んでいたかのような表現に終始している。しかし、『福山秘府』には、礼文島や利尻島のアイヌの首長から、宗谷へ連絡が届いていることが記されており⁶⁾、李志恒一行に対する保護・観察がある程度は行われていたものと思われる。

李志恒と孔哲の二人は、羽保呂から新谷十郎兵衛の船に乗って松前に向かい、金白善ら残りの6人は自分たちの船に乗って松前に向かった。これは彼らの希望であったようである。金白善と別の船に乗っていることは、李志恒も記しているとおりでである。金白善たちは、7月19日に松前に着いた。李志恒と孔哲を乗せた船は、少し遅れて7月24日に松前に着き、翌25日に二人は松前城に登城している⁷⁾。『漂舟録』では、松前着を7月27日としており、なぜかここだけ3日間のずれがあるが、その理由は不明である。なお、羽保呂から松前までは、順風だと海路5日間で着くとの記述もあり⁸⁾、非常に時間をかけて移動したことになる。単なる天候不順だったのか、それともなにか特別の事情があったのかもしれないが、その理由はわからない。

以上のように、李志恒『漂舟録』の記載と『福山秘府』などの日本側史料とを比較すると、大まかな日付と移動経路などは共通することがわかった。その一方で、『漂舟録』には、漂流の途中で日本の船から食料や水をもらっていることや、羽保呂で取り調べを受けたことについて全く触れていないなど、意図的に記載を避けたと思われる点がある。

2 『漂舟録』にみえる石将浦についての考察

李志恒『漂舟録』には、11個の地名が記録されている。諸毛谷(je-mo-gok)、占毛谷(jeom-mo-gok)、至谷(ji-gok)、小有我(so-yu-a)、마즈마이(ma-jeu-ma-i)、마지마이(ma-ji-ma-i)、南村府(nam-chon-bu)、溪西隅(gye-seo-u)、羯悪島(ga-rak-do)、石将浦(seok-jang-po)、曳沙峙(ye-sa-chi)である。これらのなかで、位置がわかっている地名は5つ、厳密に言えば4つしかない。池内敏氏の比定によれば(池内1994)、小有我(so-yu-a)は、北海道の最北端の宗谷である。また、마즈마이(ma-jeu-ma-i)と마지마이(ma-ji-ma-i)は、ともに松前のことである。松前の北方百里に位置する曳沙峙(ye-sa-chi)は、江差のこととする。いずれも池内氏の見解に従いたい。このほか、羯悪島(ga-rak-do)はサハリン(樺太)島の当

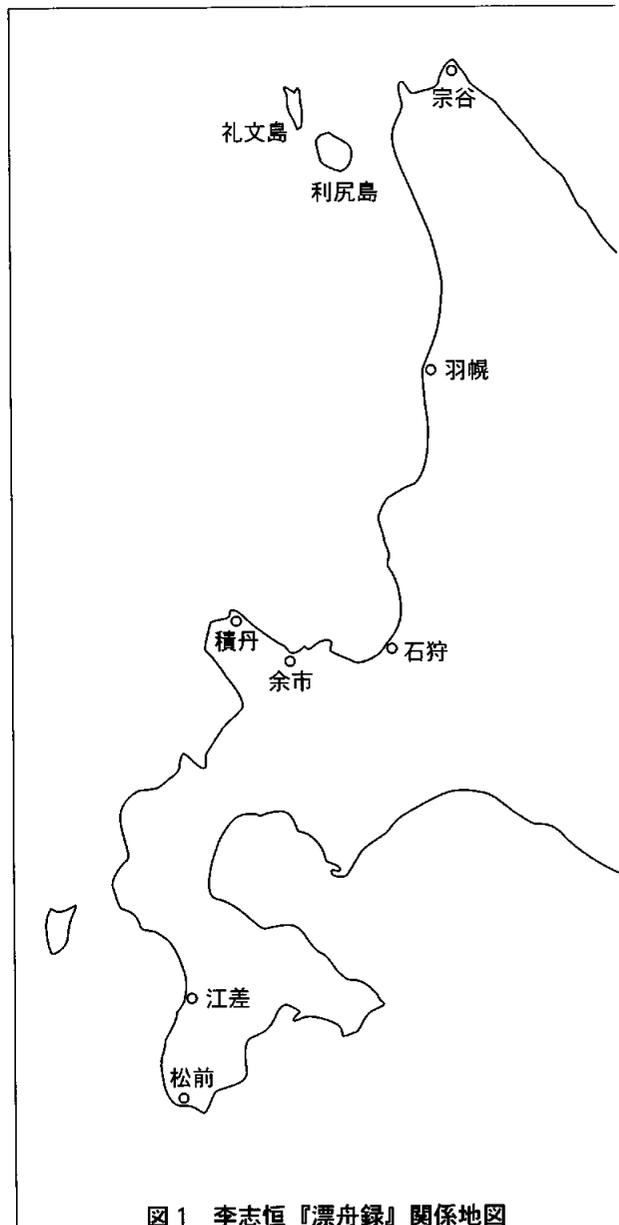


図1 李志恒『漂舟録』関係地図

時の呼び名である「唐渡之嶋^{からとのしま}」のことである（中村 2006）。

残る6つのなかで、南村府（nam-chon-bu）、溪西隅（gye-se-ou）それに石将浦（seok-jang-po）の3つは、筆談で知った漢字の地名であるか、その可能性が高いものである。これに対して、諸毛谷（je-mo-gok）、占毛谷（jeom-mo-gok）、至谷（ji-gok）の3つは、礼文島から利尻島を経て宗谷に到る道筋でアイヌから教えてもらった地名であり、アイヌ語地名と考えてよいものである。ただし、これらの地名の位置を明らかにすることはできない。

李志恒は、新谷十郎兵衛の船で7月1日に羽保路を出発し、数日の航海ののちに石将浦に着いた。この部分を、池内氏は次のように訳出している。

3日間過ぎてのちに、大きな海をひとつ越えて、あるところに到ったが、そこは石将浦と呼ばれていた。その海は蝦夷国との分界となる海であった。

池内敏氏によれば、李志恒『漂舟録』には、『海行摠載』所収の活字本がある。また、これとは別に『李志恒漂海録』という名の写本も存在するが、この写本は大韓民国国立中央図書館と東京大学付属図書館阿川文庫に1冊ずつ所蔵されている。

李志恒『漂舟録』では、石将浦は、つぎのように史料に登場する。

過三日越一大海，始到一處，號稱石將浦。厥海乃蝦夷國分界乃海也。

同じ部分は、『李志恒漂海録』にはつぎのようにある。

過三日越一大海，至石將浦。乃分界表海也。

では、この「蝦夷国との分界となる」石将浦とは、一体どこのことなのか。先ほどの石将浦の記載に続けて、

7月10日甲子。南風が強く吹き、雨が降りしきった。……十郎兵衛が私の悲しがつている様子を見て、金一銭を出して美酒一桶を買い求め、私を慰め、愁いを晴らそうとしてくれた。

という文章がある。李志恒一行が羽幌を出発したのは7月1日だから、石将浦は、羽幌から舟で10日以内にたどり着ける場所でなければならぬ。しかも思い立って「美酒」を買い求められるような場所であった。また、江差に着いたのは7月23日のことであるから、石将浦は羽幌と江差のほぼ中間に位置するものと推定される。以上のことから、石将浦の候補となる地名としては、石狩湾沿岸の石狩^{いしかり}から余市^{よいち}近辺の地域があげられることになる。

以上のことを確認したうえで、石将浦の検討に入ろう。ここで注意しなければならないのは、李志恒が、筆談で見た石将浦という表現を書き記したのか、ある地名を音で聞き自分で漢字にあてたのかわからないという点である。すでにのべたように、羽幌を出発した時点で、李志恒は日本語の堪能な金白善^⑩とは別行動をとっている。したがって、石将浦に滞在していた時点では、李志恒は筆談で意思を通じるしかなかったはずである。だが、彼らは松前で合流し、それ以降は行動を共にしているのだから、李志恒が金白善に通訳をさせて質問し直すこともできたはずである。以上のことから、筆者は、李志恒が筆談を通じて石将浦という表現を知った可能性は高いが、音で聞いた地名である可能性も否定できないと考えている。

それでは、石将浦が音で聞いた地名である可能性から検討してみよう。石将浦では何日も滞在し、酒を買い求めることができたのだから、この時期の蝦夷地としては主要な集落であったと考えることができる。『松前島郷帳』は、1700年（元禄13）に、松前藩が国絵図とともに幕府に提出したものであり、これには以下のような地名が並べられている（国書刊行会 1969：323-324）。

從_レ松前_一西在郷并蝦夷地之覺

…… 一ほろむい村 一小島 一大島 一おこしり島

從_レ是蝦夷地

一うすべち 一ふとろ 一せたない 一はませたない 一あふら 一ちわし 一しまこまき
 一夕まき 一六條間 一をたすつゝ 一たんねしり 一しりべち 一いそや 一岩内
 一しりぶか 一むいの泊り 一ふるう 一しゃこたん 一びくに 一ふるびら 一ざまゝき
 一もいれ 一よいち 一しくずし 一かつち内 一おたる内 一はつしやぶ 一しろの
 一しゃつほろ 一いしかり 一おしよろこつ 一あつた 一ましけ 一べつかり 一ほろとかり
 一はしへつ 一つるをつへ 一とまゝい 一ういべち 一てしを 一ばつかいへ

是よりそうやの内

一つさん 一のつしやむ 一そうや

離島之分

一へうれ 一りいしり 一れぶんしり 一いしよこたん

また、『蝦夷商賈聞書』は、1739年(元文4)ころに成立した、蝦夷地の経済事情に関する史料である。場所ごとの知行主や主要産物などが記されている。同史料の「城下右西北之蝦夷地之分」には、「白辺地・フトロ・勢田内・スツキ・嶋子巻・寸津・尾田寸津・磯谷・知別・岩内・フルウ・尺丹・飛國・古平・与市・下与市・ツ子タン・シクツイシ・尾樽内・石狩・アツタ・マシケ・戸間前・テシヲ・利尻・ソウヤ」などの地名があげられている(松前町史編集室1979:5-7)。

以上の地名のなかで、音の類似から石将浦(seok-jang-po)に比定できるものとしては、『松前島郷帳』の「しゃこたん」、『蝦夷商賈聞書』の「尺丹」をあげることができる。またこれ以外には、適当な地名が見あたらない。しゃこたん・尺丹は、現在の積丹である。しかし、この当時の積丹で順風を何日も待つ間に、酒を買い求めたりできたのであろうか。積丹半島は江戸時代には難所として知られていた。『蝦夷商賈聞書』にも、「尺丹ト申地……荷積り三百五拾石余り、湊悪キ故小船参ル」とある(松前町史編集室1979:6)。また、積丹という地名はアイヌ語のshak(sak)-kotan(夏の・村)に由来しており(山田2000:481-482)、そもそもは夏の間だけの集落であったようである。新谷十郎兵衛や李志恒を乗せた船が、風待ちをするために滞在した場所とはどうい考えられない。以上のことから、積丹が石将浦である可能性は低いと言わざるをえない。このことは、石将浦が漢字の音を用いたあて字である可能性もまた低いことを示すものといえる。

ではつぎに、李志恒が、筆談で石将浦を知った可能性について検討してみよう。新谷十郎兵衛が、李志恒の漂着を松前藩に報告した「西蝦夷地羽保呂金堀奉行新谷重郎兵衛廻文」の末尾には「羽保呂浦 新谷重郎兵衛」と記されており(北海道庁1936:263)、地名の最後に浦をつける表現の仕方は、この当時の蝦夷地では珍しいものではなかった。このように考えると、石将浦は、「石将の浦」と読む可能性があることがわかる。しかし、管見の限り石将という表記の地名、ないしこれに当てはまるような地名は見あたらない。また、李志恒『漂舟録』(『海行摺載』所収の活字本)、『李志恒漂海録』(大韓民国国立中央図書館本)と『李志恒漂海録』(東京大学付属図書館本)の該当部分を子細に検討しても、いずれも「石将浦」としか判読できない。

このように、李志恒が筆談で石将浦を知ったという解釈も行きづまってしまうのである。では、一体この問題をどう考えればよいのであろうか。ここで、筆者はひとつの仮説を提議したいと思う。それは、李志恒の書き記した石将浦が、正しくは「石狩浦」であったという解釈である。李志恒が、筆談で「石狩浦」と書かれていたのを読み誤ったのか、帰国後に『漂舟録』をまとめた際に書き誤ったのか、そのどちらかの結果として、本来は石狩浦とされるべき地名が、石将浦となってしまったのではないだろうか。もしこの解釈が許されるものとすれば、羽幌と江差の間に位置すること、風待ちをするにも適した場所であることなど、史料の内容とは矛盾が生じない。あくまでも推論であるが、以上のように考えることによって、石将浦の位置にひとつの解釈を示すことができる。

3 史料に現われる石狩の検討

前節でのべた、石狩浦を石狩とする仮説が成立するためには、「石狩」という漢字の表記が、1696年の時期にすでに使われていたことを確認する必要がある。1712年（正徳2）の自序を持つ、寺島良安『和漢三才図会』巻第64、蝦夷島には（寺島1988：245-246）、

思うに、蝦夷は日本の東北海中にある島である。その地は南北に長くて、北は韃靼^{だつたん}の地に隣接し、東は大洋海である。山嶽多く峻岨^{けんそ}で陸行することはできない。また石加利河^{いしかり}という大河がある。水は大へん急で石を飛ばし渉^{わた}行^りことはできず、船によっても漕いで行くことはできない。だからその河源が幾里ほどあるかは分からない。

とあり、「石加利」と表記している。また、この文章と一緒に掲げられた「蝦夷之圖」には「石茹」という地名がみえる。1720年（享保5）に完成した新井白石『蝦夷志』には（寺沢ほか1979：46）、
西瀕は周廻十二里許り。下流海に入る地は、名づけて「イシカリ」と曰う。是の河は夷地の水の最大の者なり。

とある。このように、蝦夷地に関する著名な史料では、18世紀に入っても石狩という表記はなされていない。

一方、1731年（享保16）に完成した『津軽一統志』巻第10之下、には（青森県史編さん近世部会2001：619）、

一、……又ハ石狩の狄共申分の由、松前殿よりつくなひ御取、前々のことく商仕候へハ能御座候へ共、しやくしやいんかことくにたらし寄殺され候てハせんなき事に候間、そのうへ高岡の助勢御かり、石狩中御たやし可被成候由被仰聞候、左候ハ、つくなひ出し候ても詮^{せん}なき事に候間、間合様子次第に可仕候、是悲御^{ママ}たやし被成候ハ、不叶迄一戦可仕とて、石狩の川口に小屋を三百程かけ罷有候由物かたり仕候、

とある。同書は、1669年（寛永9）のシャクシャインの戦いに際して、北海道に出兵した津軽藩の記録であり、記録の信憑性は高い。ただし、史料の成立の時期が18世紀に下るため、シャクシャインの戦いの時期に、間違いなく「石狩」という表記が使われていたことの証拠にはならない。そこで、1688年（元禄元）に水戸藩主の徳川光圀が、蝦夷視察の目的で派遣した快風丸についての記録である『御船快風丸』を見てみよう。同書には（北海道郷土資料研究会1959：14）、

一、石狩川ハバ二町バカリ流ハ日本ノ取手川ヨリノロシ、此川ニ此方ノ御舟カゝリ居コト六月末ヨリ八月始マデ居ル、

とある。この史料の存在、および前掲の『津軽一統志』により、李志恒が漂流した1696年には、石狩という表記が蝦夷地で使われていたことは、ほぼ間違いないといえる。

また、『津軽一統志』巻第10之下、に（青森県史編さん近世部会2001：619-620）、

一、石狩へ参候ハ、川上の蝦夷共も川口に三百程小屋を掛け罷有候由、左様の所へ拙者共参候ハ、大勢御船へ乗込狼藉仕候ハ、了簡難仕存候間不参候、

とあるように、石狩はシャクシャインの戦いの時には、石狩川水系のアイヌが集結する場所であった。『御船快風丸』と同じく1688年の快風丸関係の記録である『快風丸渉海記事』（北海道郷土資料研究会1959：3-4）には、

一、石狩川広さ那珂河よりも広く御座候、深も同由に候、川脇に蝦夷共罷在候、両脇ハ平場にて四五里程脇に大山見へ申候、然共右のひら場木立しけり往来不罷成候、舟にて常にかよひ申候、一村に大将分の蝦夷一人つゝ御座候、乍去召遣無御座候、女房にてその内にも女房四五人持申候大将御座候、然共女房老妪には指置不申候、隣郷に家老軒つゝに女房老女つゝ指置申候由、常に

見申候所も大将分とは見へ不申候、乍去石狩川の惣大将はかるへかと申候、是には脇の蝦夷出合の節かるへか手を出し、蝦夷の頭を押してしはらく指置手をはなしのき申候、食物八干鮭を細かに切湯煮を仕、さめの油を指而喰し、生鮭は氷頭の処を常に給へ申候由、とあって、石狩のかるへかが大きな勢力を持つ首長であることを記している。石狩は、石狩川の河口に位置する水上交通の要衝でもあり、新谷十郎兵衛が「美酒」を買い求めた石将浦に比定しうる場所としてふさわしいと思われる。

おわりに

以上、推論に推論を重ねてきたが、石将浦を石狩とする筆者の解釈はあくまで現段階の仮説であり、今後の検討によっては見直しを迫られる可能性があることを明記しておく。ただ、もしこの仮説が成り立つものとすれば、つぎに問題となるのは、李志恒が記す「蝦夷国との分界となる」という意味の解釈である。はたして、これが松前藩の権力によって決められた分界であったのか、それとも当時のアイヌの人たちが決めた生活圏としての分界であったのか、それによって、この時期の蝦夷地の境界についての認識も変更を迫られることになる。石狩アイヌの位置づけを含めて、近世蝦夷地の歴史研究に、新しい疑問を投げかけることができるかもしれない。

謝 辞

大韓民国・釜慶大学の蔡榮姫先生と申宗大先生には、近世の韓国語の発音や表記についてご指導をいただいた。また京都府立大学の井上直樹先生には、大韓民国国立中央図書館蔵の『李志恒漂海録』の複写を送っていただいた。あわせて深く感謝申し上げます。

また、本稿は、2006年11月25日に釜慶大学で開催された「東北アジア文化学会第13次国際学術大会」における口頭報告「李志恒『漂舟録』に見える北海道の地名『石将浦』について」の原稿に加筆訂正したものである。当日、貴重なご指摘をいただいた、江原大学の孫承喆先生と東北学院大学の七海雅人先生に心から感謝申し上げます。

[注]

- 『福山秘府』巻之30、朝鮮漂人部上、朝鮮國漂人李志恒呈辭（北海道庁1936：265）、四月十三日。只以_レ單身_ニ。乗_レ此小舟_ニ。……同月二十八日、海洋中猝遇_レ狂風_ニ、舟中尾木折破、不_レ能_レ制_レ船。……幸頼_レ天助_ニ。五月十二日始泊_ニ于貴州北土一境_ニ。
- 『福山秘府』巻之30、朝鮮漂人部上、依_レ朝鮮人漂着_ニ而、外崎新十郎出府之節、北條安房守殿へ被_レ差出_レ候書札（北海道庁1936：267）、
一 當所西蝦夷地「レフンシリ」ト申島へ八人乗候異國船漂着仕、夫ヨリ「リイシリ」ト申島へ參、蝦夷ノ教ニテ「ソウヤ」ト申所へ着、「ソウヤ」蝦夷介抱仕候テ、當五月二十日羽保呂ト申所へ參着仕候。
- 『福山秘府』巻之30、朝鮮漂人部上、依_レ朝鮮人漂着_ニ而、外崎新十郎出府之節、北條安房守殿へ被_レ差出_レ候書札（北海道庁1936：267）、
一 當五月十三日「ソウヤ」ト申所へ着、五六日滞留仕候テ、五月廿日羽保呂へ參、六人ノ異國ノ者、七月十二日江差村へ着、七月十九日當所へ參着仕候。六人ノ内金僉知ト申者、日本詞能存候。七月二十日僉議仕候處、朝鮮國釜山浦ノ者ノ由。江原道府伯へ見舞ニ參候故、當四月朔日出船、同廿八日逢_レ大風_ニ、折_レ楫、海上數日漂流仕候而「レフンシリ」へ着仕候由申候。當月十九日「ソウヤ」へ差遣候私手船罷歸候。「ソウヤ」夷人ノ頭カチホツテ、シカタイヌ、ライ此三人方ヨリ異國船ノ様子申越候。レフンシリ蝦夷人ノ頭タロウナ、リイシリ蝦夷人ノ頭イヌシヨマエキワカ兩人、右ノ者共段々ソウヤへ相通候。異國之詞蝦夷ト一圓通不_レ申候故、大方推量ニ存候趣申越候。
- 『福山秘府』巻之30、朝鮮漂人部上、西蝦夷地羽保呂金堀奉行新谷重郎兵衛廻文、從_レ朝鮮國_ニ流來船、松前迄爲_レ登申付候口上之書之事、は、新谷重郎兵衛の名で出され、「元禄九年丙子七月朔日」の日付である（北海道庁1936：262-263）。この文書の宛先は、御船上乗衆中、同船頭衆、夷地津々浦々商船上乗船頭衆、などとなつてお

- り、新谷十郎兵衛の船とは別に、自分たちの船で松前に向かう金白善ら六名に与えた文書と思われる。この7月1日が、羽保呂を出発した日付とみて良いであろう。
- (5) 『福山秘府』巻之30、朝鮮漂人部上、朝鮮國漂人李志恒呈辞（北海道庁1936：266），……耶蘇者之言不_レ知。朝鮮元無。
- (6) 注3史料。
- (7) 『福山秘府』巻之30、朝鮮漂人部上、朝鮮人館前高札竝勤番條目（北海道庁1936：263-264），元禄九年丙子七月十九日、朝鮮人六人、從_二西在郷_一到着、令_二登城_一、同月廿四日、李先達、孔裨將兩人從_二江差_一陸地到着、同廿五日兩人登城、旅館横町並川宇左衛門宅也。
- (8) 『福山秘府』巻之30、朝鮮漂人部上、依_二朝鮮人漂着_一而、外崎新十郎出府之節、北條安房守殿へ被_二差出_一候書札（北海道庁1936：269），羽保呂ヨリ松前迄船路三百四五十里、順風五日程二大船ハ走來申候。
- (9) 注3史料に「六人ノ内金僉知ト申者、日本詞能存候」とあるように、金白善の日本語の会話能力は松前藩側からも高く評価されていた。

参 考 文 献

青森県史編さん近世部会

2001『青森県史』資料編 近世1，青森県。

北海道庁

1936『福山秘府』『新撰北海道史』第5巻，北海道庁。

北海道郷土資料研究会

1959『北海道郷土研究資料第五 快風丸記事』北海道郷土資料研究会。

池内 敏

1994「李志恒『漂舟録』について」『鳥取大学教養部紀要』第28巻。

1995「17世紀、蝦夷地に漂着した朝鮮人」『日本国家の史的特質（近代・近世）』思文閣出版。

2006『大君外交と「武威」』名古屋大学出版会。

国書刊行会（編）

1969『続々群書類従』第9，続群書類従完成会。

松前町史編集室

1979『松前町史』史料編 第3巻，松前町。

松本あづさ・三浦泰之・東俊佑

2006「近藤家資料のなかの異国船関係史料」『北海道開拓記念館調査報告』第45号。

中村和之

1998「李志恒『漂舟録』にみえる蝦夷錦について」『北海道の文化』第70号。

2006「李志恒『漂舟録』にみえる『羯悪島』について」『史朋』第39号。

寺沢 一ほか（編）

1979『北方未公開古文書集成』第1巻，叢文社。

寺島良安

1988『和漢三才図会』九，平凡社。

山田秀三

2000『北海道の地名』草風館。